

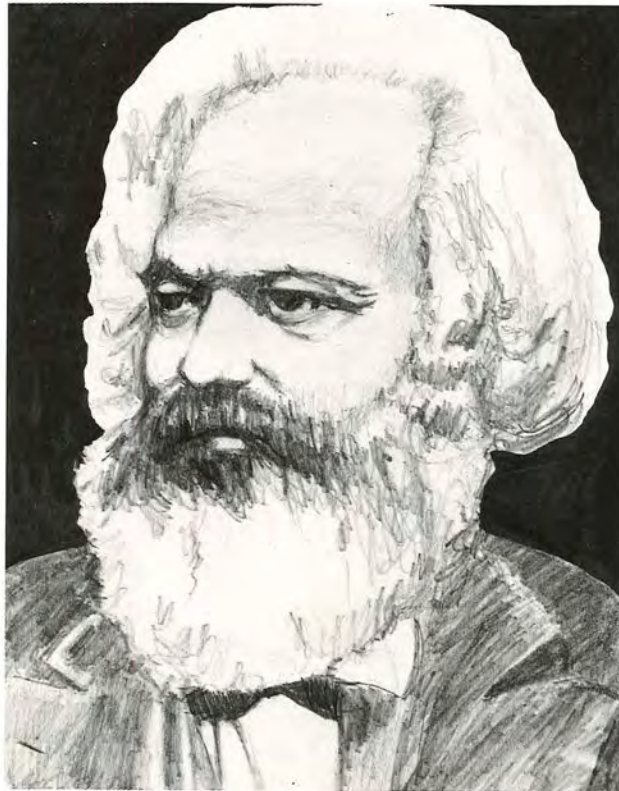
働きつつ学ぶ権利を担う経済科学の総合雑誌

経済科学通信

39

1983年 6月

総特集・没後百年
マルクスの現代的再生めざして



基礎経済科学研究所

経済科学通信

目次

第39号 (1983年6月)

総特集・没後百年——マルクスの現代的再生めざして

マルクス没後百年をどう記念するか……………編 集 局 (2)

I 記念シンポ・歴史認識と社会変革

マルクスにおける歴史認識と社会変革……………重 田 澄 男 (3)

労働日の制限・短縮と人間の発達……………森 岡 孝 二 (15)

民衆発達の経済史を求めて……………藤 岡 惇 (28)

討論のまとめ……………(38)

II 私の生活とマルクス

迷った時は基本に帰ろう……………安 満 弁 吉 (41)

マルクスと私と基礎研と……………森 本 載 般 (43)

マルクスのコミュニオン認識に新たな光を……………田 中 秀 幸 (46)

『フランスにおける内乱』と革新自治体……………山 田 昇 (49)

III マルクス理論と現代

現代資本主義と相対的過剰人口論……………伍 賀 一 道 (51)

フランス「三部作」と資本主義国家論……………鶴 田 廣 己 (61)

労働運動発展の展望とマルクス……………中 原 優 (70)

マルクスの賃労働概念と変革主体……………内 山 哲 朗 (80)

環境危機とマルクス主義……………寺 西 俊 一 (88)

IV 動 向

マルクス没後百年をめぐる他誌の動向……………江 尻 彰・竹 味 能 成 (97)

書 評 本山美彦『貿易論序説』によせて……………中 尾 茂 夫 (101)

寄贈本紹介 人間・社会・歴史研究会編著『人間・社会・歴史の研究』……………(40)

『季刊 社会科学通信』(武蔵野社会科学研究会)……………(96)

基礎研刊行物紹介 『労働と研究』第6号……………(27)

本誌最近号内容目次一覧……………(60)

表紙イラスト(鈴木 隆)

民衆発達の経済史を求めて

藤岡 惇

基礎研編『人間発達の経済学』の刊行は、アメリカ現代経済史を専攻する筆者にも、刺激的な出来事であった。この提起を経済史の分野でどう受けとめたらよいか。本稿では、大塚史学の超克といふかねてからの関心にひきよせながら、この問題について考えてみたい。かつて筆者は本誌上で、反動史学による民主主義史学への攻撃に抗して、統一戦線を偽りのない土台のうえで築き上げるためにも大塚史学とマルクス主義史学とを方法的に峻別することが急務だと論じたことがある¹⁾。本稿ではこの問題意識をひきつぎながら、マルクス主義的経済史の現代的再生の方途を探ってみたいと思う。

I 戦後日本の社会科学とマルクス主義

(1) 社会科学の三大潮流

戦後日本の社会科学の近現代史観を大別すると、三つの流れに分けることができよう。マルクス主義・古典的近代主義（市民社会論）・現代的近代主義（産業社会論）がそれである。

第一のマルクス主義は、いうまでもなく労働者階級の立場から近代資本主義社会の矛盾を分析し、社会主義転化の展望を根拠づけようとする流れである。第二の古典的近代主義とは、戦前の日本が進んだ半封建的専制的「近代」を嫌悪・否定し、当面これに代わる民主的近代の実現（日本における市民社会原理の貫徹）のために学問的努力を集中しようとした流れの総称である。

戦前型の遅れた社会関係を一掃し、日本社会

の平和化・民主化をめざす課題では、この二潮流は一定の協力関係にたち、理論的交流も様々に試みられた。しかし戦後改革をへて高度成長の下で古い共同体的諸関係が急激にくずれさるにつれて、両潮流の分岐が次第に深まることは避けられなかった。加うるに共産党六全協の自己批判（55年）、スターリン批判・ハンガリー動乱（56年）など従来のマルクス主義に深刻な反省をせまる事態の続出が、この傾向に拍車をかけた²⁾。

第三の流れ（現代的近代主義）は、近代化の本質を民主化よりも産業化・工業化にウエイトをおいて把え、明治以降の日本を含めたいわば産業的近代をまるごと肯定・賛美する潮流である。戦後、古典的近代主義が次第に現状批判的情熱を喪失する中で（「悪い社会主義とくると良い資本主義の方がましだ」）、この流れはアメリカの体制科学の輸入（ロストウ理論・産業社会論・文化史・計量経済史等々）と結びついて大きく成長した。

明治百年祭論争で示されたように、この流れは日本の産業的近代＝アジア侵略を、今日の第三世界の倣うべき「非共産主義的近代化」のモデルとして称賛する帝国主義的歴史観たる性格を鮮明にしつつある³⁾。

(2) マルクス主義史学の「弱点」批判の本格化

世界的なマルクス主義の自己批判期というべき50年代後半は、日本でもマルクス主義史学への不信・不満が憤出し、その「弱点」のいわば古典的定式化の試みられた試練の時でもあっ

た⁴⁾。その重要なきっかけとなったのが、今井清一・遠山茂樹・藤原彰という三人のマルクス主義史家の労作『昭和史』(55年、岩波新書)の刊行であった。これを「人間的個性の不在」「迷いを知らぬ」として亀井勝一郎が批判の矢を放って以来、篠原一、丸山真男、松田道雄、井上清、堀米庸三などをまきこんで展開された「昭和史論争」は、当時の状況の縮図であった⁵⁾。

以後、今日までくり返されてきたマルクス主義史学の「弱点」指摘のいわば「定石」を整理してみると、次のようにまとめることができよう。

①階級一元史観——マルクス主義は人間のとらえ方が機械的の一面的で、階級闘争で全てをわり切り、「抽象的概念をむやみに擬人化して主語として用いる傾向」がある。したがって生身の人間の個性の多様さ、その迷いと決断が消失してしまう。さらにまたこの「弱点」が、階級の名で個性を抑圧し、滅私奉公を強要するスターリン主義の悲劇を生んだ、等々。

②基底体制環元主義——マルクス主義は人間行動を動機づける複雑多様な欲求(余暇・名誉・成長・来世での救済など)をきりすて、歴史の動因を結局、狭い経済的利害だけに帰着=環元するため(経済主義)、思想や宗教の果す決定的役割、上部構造や政治過程の独自のダイナミズムを軽視するという批判である。

③本質顕現思考——②の傾向の裏がえしとしてマルクス主義は人間の行動をもっぱら階級の本質=必然性の顕現として捉え、複雑な可能性・偶然性に富む歴史の曲折を捨象する「迷いを知らぬ歴史学」となる。たとえば『資本論』においては「人間は……いわばただの物の動きにお付きのように付きしたがって出てくるだけ、むずかしく言えば、経済学的諸範疇の人格化、そういったきわめて抽象的な影のような姿で現われてくる⁶⁾」という大塚久雄氏のマルクス主義観にも、上のような認識がやどっているとみてよいであろう。

④歴史的単線主義——その結果、マルクス主義は世界史を必然性=基本法則の顕現として捉

え、各国史を原始共産制・奴隷制・封建制・資本主義・社会主義という西欧中心の単純な段階区分で孤立的一国史的に裁断しがちだとする⁷⁾。

⑤市民社会原理の軽視——社会主義世界でも民主化要求(「人間の顔をした社会主義」)が噴出する事態をふまえて、社会主義における市民社会原理の復活・全面開花の必要という論点が強くおしだされた。

⑥生産点第一主義——マルクス主義は、生産現場の階級関係の分析に偏りすぎる。もっと家族や地域の生活文化、心の領域にふみこまないと、「人間の生の様式」をありのまま把握できないという批判が強まり、この見地から法則ぎらいの社会史や民衆史をもてはやす傾向も強まった。

⑦工業化中心主義——マルクス主義もまた、生産力増大=工業化をやみくもに追求し農業にも工業的論理をもちこんだあげく、人間の根元的な生存条件自体を掘りくずしてしまう西欧合理主義の一変種ではないか、とする批判が社会主義でも公害が発生し、「成長の限界」が高唱される中で登場した。この動向は、「生態系の経済学」や「身のたけの技術論」でマルクスをのりこえようとする様々な試みを生みだしている⁸⁾。

このようにマルクス主義史学の「弱点」批判は多岐にわたるが、総じて人間の経済的解釈にたつマルクス主義では、生身の人間をまるごと捉えられないのではないかという批判、そこに一つの焦点があったことは間違いない。したがって人間主義によってマルクス主義の「盲点」・「空隙」を埋めようとする試み——マルクス主義相対化・超克の運動が、くりかえしいわば法的に追求されることとなった。「社会科学の人間化」の名の下にM. ウェーバーによってマルクスを超克しようとした大塚久雄の試み、デュエイによって乗り越えようとしたかつでの清水幾太郎、同様にフロイトに拠った宮城音弥、ウェーバーからT. パーソンズまで駆使しようとした川島武宣、フォイエルバッハやサルトル・初期マルクスを使ってマルクス哲学の「人間

化)をはかった主体的唯物論者たちが、その例だといってよい⁹⁾。経済学分野では、大塚史学の影響下で階級関係を超越する「歴史貫通的な基底＝理論層」(共同体・市民社会など)をマルクスに「発見」することでレーニン以来の「粗雑な階級一元史観」を克服しようとした「市民社会派」の英雄たち、また最近ではフロイトとエコロジー論とで市民社会論さえのりこえよとまで提唱する山之内靖の軌跡にも、上の動向を看取することができる¹⁰⁾。

(3) マルクス主義史学の新動向

このような「弱点」をめぐる論争のなかで、マルクス主義史学の側も一定の反省・脱皮がせまられ、以後私のみるところ三様の動向が勢いを得るようになる。

その第一は、上部構造や人民の主体的・個性的契機を重視する「人民闘争史研究」の必要が高唱されたことである。範疇や構造は語るが「階級闘争のぶつかりあう響きの聞えぬ、人間のいない法則だけの世界」¹¹⁾に傾きがちの経済史研究者への不信といらだちが、この動きに拍車をかけたことは想像に難くない¹²⁾。この潮流が、70年代前半の歴史学研究会の大会テーマを主導するが、他面歴史の構造的・経済史的把握から遊離する時、容易に人民の覚醒・危機・可能性の側面を過大評価する歴史的盲動主義におちいりがちとする・この動向への批判も峻烈であった¹³⁾。

いま一つの動向は、従来の経済史が西欧中心の単系的発展に偏るという反省にたち、国際的契機を重視しグローバルな視点から「西欧近代」を相対化する史観が強まったことである。この動きに、第三世界土着のマルクス主義を標榜する「新従属学派」が大きな影響を与えた。

最後に、これまでは生産点や非日常的な闘争の局面に注目しすぎ、「無告の民」の生活・文化を含む日常性の領域(柳田国男の「常民」の生活・民俗)や心性の領域(民衆思想)などを無視しがちだとの反省にたち、社会史や民衆思

想史、伝記・歴史文学の成果に学ぼうという気運がひろがった¹⁴⁾。

Ⅱ 大塚史学の魅力の秘密

さて戦後、古典的近代主義の立場からマルクス主義の相対化を試みた最も重要な業績の一つに、大塚久雄氏の西洋経済史学説(大塚史学)がある。大塚史学のかつての魅力——とくに戦争直後の「市民社会青年」たち¹⁵⁾の心を把えてはなさなかったあの魅力の秘密はどこにあったのか。

大塚氏によれば、「分を忘れた」「身のほど知らず」が難詰の言辞とされ「人間は結局殴らなければ駄目だ」と囁やかれる伝統主義的人間類型の支配する社会——それが戦前の日本であった¹⁶⁾。この国で人格的に独立した近代的民主的人間類型をどう形成するのか、民衆を民主主義の担い手へと人間変革するための主体的客体的条件は何か。このいわば「近代化の人間的基础」の解明が、大塚史学を貫く最大の問題関心であった。

大塚氏は、世界史上唯一、自生的に近代的人間類型を生みだした西欧——とくにイギリス近代史研究に沈潜する中で、次のような回答をひきだした。

まず第一に、封建的・共同体的な束縛から自由な自律的個体たる「中産の生産者層」(小商品生産者と等置)が全社会的に成立し、これを培養土壌として一物一価の価値法則の作用の下で、資本主義が下から自生的に生まれるばあい——これが近代市民社会形成の経済的土台となった。

今一つ、西欧における近代人形成の宗教的土台・精神的原動力となったのは、古プロテスタントの禁欲倫理であった。「勤労・節約・周到・自発的合理的な生活」を命ずる「世俗内的禁欲」のエートス(生活倫理)が、民衆を魔術から解放し、近代的合理的人格を生みだす上で(経済的土台と並ぶ)決定的な役割を果たした(ウェーバー的な二元論的説明)。

このような近代的人格の典型は、D・デフォアの創作したロビンソン・クルーソウの卑屈や因習を知らぬ独立不羈の人間像にあるとして、大塚氏はこれを共同体的人間類型と対蹠的な「ロビンソン型人間類型」と名づける¹⁷⁾。

こうして大塚氏は、ロビンソン型人間の推進する西欧の民主的近代化をいわば鏡として、戦前日本の恐るべき社会的後進性、その醜い奇型性を批判的にうつしだした¹⁸⁾。そして日本でも、農民層が本格的に解放され（「アメリカ型解放」）、国内市場が本格的に創出され¹⁹⁾、しかも禁欲的エートスに媒介されたばあい、民衆は商品経済の力で民主主義の担い手へと人間変革しうるとする展望を理論化したこと、換言すると英米型のみちを歩むと民衆は、人間的資質・徳性においてはるかに発達できるという希望を語ったこと——ここに大塚史学の魅力の秘密があったように思われる。

他方「民主的近代」自体が宿す機械制大工業の下での民衆の発達の現代的展望についてはどうか。この点についての大塚氏のイメージは年を追ってペシミスティクな色調を強める。すなわち大工業の発展は、合理化・数量化・官僚制を不可避とし「意味の喪失」「心の貧しさ」がまんえんし、その極「精神なき専門人、心情なき享楽人、この無のもの」というウェーバー的世界に大きく傾くのである（大衆社会論から管理社会論への接近²⁰⁾）。つまり資本主義的貧困化のなかに「鉄の檻」の「機械的化石化」だけを見、そのなかに民衆発達の一層ゆたかな潜在的可能性——全文明（＝階級）社会の否定面を揚棄する主体的客体的材料が形成されていることをみおとす。したがってまた「個人の私有財産と営業の自由」にもとづかずとも新たな民主主義の担い手が形成される展望²¹⁾をみおとし、社会主義に希望を託すのをためらい²²⁾、結局ロビンソン型を超える民衆発達の展望を閉ざしてしまうのである。

それはさておき大塚史学から学ぶべき積極面として、次の三点を指摘しておきたい。

その第一は、近代化の二つの型（プロシア型

とアメリカ型）の相異の問題を提起し、民衆にとってアメリカ型選択のもつ歴史的＝相対的進歩性を理論化したことである（ただし古い土地制度破壊の方法に限定されたレーニンの「農業資本主義発展の二つの道」理論を不当に拡張し、前期的資本と産業資本²³⁾、近代化自体の二つの型という非弁証法的な対抗理論にまで組みかえたのは、その消極面である）。

第二に、貧困化の意味をモノの欠乏にとどまらず、人間的資質の貧しさ＝発達障害の深みにおいて把えようとした。したがってアメリカ型の進歩性についてもモノの豊かさに解消せず、人間発達論的厚みにおいて把え、民主主義を担いする民衆的基盤の成長を真摯に追求したことである（ただし人間発達論に膨らます際、方法的二元論＝不可知論に後退したことは、その消極面である）。

評価すべき第3点は、大工業を基盤とした民衆発達の展望は語りえないにしても、戦前型「近代」を嫌悪し、産業社会論への融合を峻拒するその反ファシズムの姿勢であろう。大塚史学の民主主義精神を、右から批判・去勢しようとする現代的近代主義とは共に闘わなければならない。ファシズム抬頭期のドイツ共産党が犯したように小生産者・農民の役割を否定的にしか評価しない左翼の誤りを今日くりかえしてはならない²⁴⁾。

Ⅲ 大塚史学超克の方法

(1) マルクス主義体系との峻別

すでに述べたように大塚史学の業績の一つは、古い土地関係に圧迫されないばあい、商品経済の発展が「民富」の形成をおして民衆の力量発達にどのような肯定的作用を及ぼすか、の究明にあった。実際北米大陸の白人入植者—「疲れを知らぬヤンキー魂」をもつあの「大草原の小さな家」の主人公たちを、農奴制におしひしがれたロシアの「怠け者の百姓」と比較するならば、その差は明らかであろう。

しかし他方、最良の発達条件を恵まれた「アメリカ型」の白人小農民といえども、万能の貨幣の権力に翻弄され、「生存の保障」を根底から奪われた孤独な「攻撃型自我」（他人に対しても自然に対しても）を拭いさることができず、東部の金権勢力＝支配階級にあやつられ、原住民からの土地略奪の先兵にしたりられ、黒人や後続移民との団結能力が絶望的に弱く、その結果自らも、原蓄のなかで「勤労にもとづく民富」を容赦なく収奪されていった。民衆発達のこの痛ましい小商品生産者の限界から眼をそらしてはならないであろう。

たとえば、偉大なアメリカ独立革命も、原住民や黒人奴隷にとっては「アメリカ大陸の支配権をめぐるのヨーロッパ人内部の対立と抗争」にすぎず、「抑圧者の国籍が変化した」以上の意味をもたなかった²⁵⁾。実際、その後の奴隷制は、冷酷な残忍さではラテンアメリカの水準をはるかに抜いていたし、西部の小農民民主主義の輝かしい代弁者、A. ジャクソンは、南東部から徹底的に原住民を駆逐した最も無慈悲な迫害者でもあった。さらにまた南北戦争で流された62万人もの血で購われた黒人の自由を、やすやすと旧奴隷主に売りわたしたあの「白人リベラル」の致命的弱点。財産相続の必要上「だれが父親かについて議論の余地のない子どもを生ませる」という男性の打算的目的の上にきずかれた「女にとってだけの一夫一婦制」²⁶⁾＝家事奴隷状態から女性を解放する上での「ロビンソン型人間」の無能力、等々。

このような小生産者型発達に内在する歴史的限界（国家権力を特権的な金権・搾取階級に譲りわたしつつに自らも全民衆も解放しえない限界）を直視し、この狭い枠をこえて進む民衆の世界史的成長の全貌（この点後述）を、果して大塚史学は正確に理論化しているかと問えば、答えは否定的ならざるをえないであろう。なぜそうなのか、まず第一に、マルクス主義体系との異同を徹底的に吟味し、両体系を峻別する中で、その根拠を探ってみること——この作業が大塚史学超克のための第一のポイントとな

らう。

たとえばロビンソン型人間の世界を大塚史学は、資本論第一篇の「一物一価の商品世界」によって根拠づける。もとよりこの世界がバラ色一色ではないとして、生産力と営利＝「人慾獣」との絡みあいまでは一応説明する²⁷⁾が、人間発達にとってより深刻な「生存の自由」自体を根底的に奪われた世界、貨幣の権力が猛威をふるう不安と絶望の世界であることを大塚史学は十分汲みとってはいない。このような歪みをつくりだす資本論の「論理＝歴史説」的解釈や価値法則の静態的把握の問題まで掘り下げた批判的検討が求められよう。

また上の弱点と関わって、大塚史学は「資本の本源的蓄積」の基本線を、単純商品経済に内在する矛盾＝価値法則の静的・牧歌的作用による両極分解の所産として説明する²⁸⁾。このような小生産者の牧歌的両極分解説は、むしろマルクスが「原蓄章」で指弾するブジョア的原罪物語の世界に近いものであり、実証的にも支持しえないことはいままでもない²⁹⁾。実際、封建制起源の大地主制が強固に根をはるイギリスでは、土地貴族による農民つぶしや植民地略奪が、原蓄の決定的契機となったのは当然として（そのゆえ尾崎芳治氏の論証するようにイギリスを封建制から自由な「中産的生産者層の祖国」にしたてるのは実証的にも大問題である）、封建遺制の比較的少ないアメリカ北部でさえ、植民の富は少数の搾取者階級（英系の商業資本や鉄道会社）に容赦なく吸いあげられ、小農民たちの「民富」はその統治能力とともに系統的に略奪されたこと³⁰⁾は、厳然たる事実であった。封建制から資本制への移行が、人類史上私有財産と国家が生まれた後の階級諸社会における搾取の形態転換にすぎない以上³¹⁾、上の事態はいわば当然の避けがたい結末というべきであろう。

(2) 現代の民衆発達の史的基盤の解明

大塚史学を超克するいま一つのカギは、小生産者の限界を突破しつつ進む今日の民衆発達の

巨大な姿をリアルに理論化する経済史を積極的に構築することであろう。そしてその中で大塚史学が希求した民主主義を担いうる自立した人格（＝市民）は、現代的条件の下でいかに発達させるかを解明し、民衆発達の経済史をより全面的で完全なものにつくりかえることが必要ではないだろうか（すでに歴史学界でも「近代（19世紀ないし市民革命期）の民衆」という伝統的視点から「民衆の近代」へ——民衆の今日的成長にとっての近代の意味の解明というより巨視的な視点へと発想を転換する必要が提唱されている³²⁾。この作業はまた、人間絶滅の核戦争と日本型ファシズムの危機と闘い、古典的近代主義者とともにも民主主義と人間発達の今日の条件を守りぬく上で不可欠の課題ではあるまいか。

そこで以下、民衆発達の経済史の現代的構築のために、どのような事態の理論化が必要なのか、いくつかの論点を試論風に素描しておきたい。

IV 世界史における現在

世界資本主義の成長と全般的危機の激化を背景に、世界中いたるところで民衆は、人権（民主主義的権利）を武器に帝国主義や金融資本のロボットたることを拒否し始めた。小生産者的発達の狭い枠をこえて、一步一步陣地戦の形で、帝国主義権力から自立した発達の自由を世界的規模で拡大しつつある——それが現代の民衆の姿であろう。その特徴的様相を三大革命勢力に即して素描しておこう。

(1) 社会主義世界の民衆の発達

ロシア革命を契機に小生産者もプロレタリアに導びかれて「万人に凡庸を命ずる習慣の奴隷」を脱して、社会主義にむかう時代がはじまった。現存社会主義は、民衆への生存権保障の点では、すでに資本主義をはるかに上まわる成

果をあげている。もとより現存社会主義は「生成期」固有の「ずれとよじれ」を残し³³⁾、官僚主義を克服しうる住民の統治力量—労働者階級の発達・成熟上の弱点には容易ならざるものがある。しかし、とも角も世界資本主義の一角がくずれ、全面発達を保障しうる社会主義の世界史的生成が始まったことは、資本主義世界の民衆の発達・人権保障の上に巨大な反作用を及ぼすこととなった。

(2) 被抑圧民族の自立と連帯力量の巨大な成長

第二次世界大戦におけるファシズム＝人種主義勢力の世界的敗北は、特に被抑圧民族の発達にとっては世界史上の分水嶺ともいべき大事件であった。これを契機に帝国主義勢力は新植民地主義というはるかに不安定でコストの高くつく支配形態に後退させられ³⁴⁾、非同盟運動展開の条件が形成された。こうして歴史的に被抑圧民族がかかえてきた深刻な発達障害——とくに自立と連帯力量の決定的弱点を清算・克服しうる時代が始まったのである。

実際アメリカ大陸の征服・黒人奴隷の連行・アフリカ分割など第三世界受難の全歴史は、白人侵略者と闘うべき被抑圧民族内の団結能力の絶望的欠如を示す諸事実、部族間の分断・同志打ちによる抵抗運動の自壊を示すまさに無数の悲劇によって彩られているといつてよい。

しかし被抑圧民族自体土地を奪われプロレタリア化する中で、さらに第二次大戦後の人権保障運動と結びついて、このような弱点を克服しうる新たな可能性が生まれてきた。たとえば、かつて400万人を超えた北米大陸のインディアンは、19世紀後半には全滅寸前まで追いこまれながら、今ではプロレタリア化のおかげで部族間の反目の伝統を克服し、稠密な人口を擁する中南米のインディオ諸部族と連帯する中で、民族のほこりと統治力量をとり戻す道を歩みはじめた。

また黒人のばあい、南北戦争後も農民的自立

＝小生産者型発達のみちを保障されぬハンディを背負いつつも（南部の土地革命の流産）、大工業と人権の作用によって、大局的にはその力量を大きく成長させてきた。たとえばアメリカ帝国主義の先兵として白人並みにフィリピンの原住民と闘う栄誉を求めたあの1897年の黒人民衆を、ベトナム戦争当時の黒人と比較してみよ。また19世紀末のあの人種間分断による南部ポピュリストの潰滅の悲劇を公民権運動に体现された今日の到達点と比較してみよ。そうするならば、分断と闘う中で雄々しく成長する民衆の姿が鮮明になるであろう³⁵⁾。

次に眼を第三世界の被抑圧民族に転じれば、「民族の自由」と自立を求め、帝国主義の組織する生存競争・分断攻勢をはねのけて前進する非同盟運動の雄姿——これを支える民衆の巨大な成長に瞠目せざるをえない。試みに、数億人のインド民衆が、部族抗争に乗ぜられてわずか数万の英軍によって易々と征服された経緯を、今日のベトナム・ニカラグアの事態と比較してみよ。またかつて列強の手玉と化し、無数の同志打ちをくりかえしたあのバルカン諸民族の悲劇を、連邦国家に結集する今日のユーゴ諸民族の統治力量の到達点と比較してみよ。

このような事態の発展は、歴史学界にも大きな反響をよびおこした。歴史学研究会は、80・81年度の大会テーマとして「世界史における地域と民衆」をかかげ、下から自主的に地域を組織する民衆の力量が世界史的にどう形成されつつあるのかを解明しようとした。すなわち帝国主義の分断支配に乗ぜられぬように、部族・民族間の対立抗争をどう自主的に調整するのか。地域（帝国主義によって人為的に設定された国境線のひき直しも含めて）を自主的に画定し、その地域を独立国家に（必要ならば国民国家の枠をこえて）どう下から組織するのか。そのために必要な民衆の反帝国主義的な自立と連帯の力量、民族としての統治力量が、どう世界的に形成されてきたのかを追求し、これを軸に世界史を再構成しようとしたのである³⁶⁾。このような民衆の反帝国主義的成長の全貌は、

大塚史学の方法では到底把えきれないこと³⁷⁾は自明であろう。

(3) 先進資本主義国の民衆の発達

——現代民主主義の担い手像

先進資本主義国でも民衆の成長は、「ロビンソン型」の限界をのりこえて進んだ。かつての封建国家と地主にかわって現代国家と金融資本が市民的権利の主要な抑圧者として登場した。他方「ロビンソン型人格」を支えてきた小生産者的自立の条件が衰退するとともに、労働者階級が新たな民主主義の担い手として登場してきたからである。大工業の発展・とも働き・社会権保障を背景に、孤独で攻撃的な「ロビンソン型」とは異質ないわば共生型——「ともに働き、ともに考え、ともに生きる」「三とも型」³⁸⁾ともいうべき新たな人格が労働者階級の中に潜在的に形成される。実際今日、苛烈な生存競争と「会社人間」化の攻撃に抗して、良心の自由を守り民主主義を日々担っているのは、とも働きによって相対的に資本から自立し、家庭内でも徹底した民主主義を実行する、いわば「看護婦の親父頑張る」型の新たな人間群像ではないだろうか（少くともロビンソン型市民社会論では「妻たちの思秋期」に悩む女性たちのハートをつかみえないことは確かだ³⁹⁾）。とすればこの無数の「看護婦の親父」たちの資本から自立した頑張り＝発達を支えている社会的条件・その史的基盤を解明しないかぎり、民衆発達の今日の姿を把えきれないことは確実である。

以上総じて、ロシア革命以降特に第二次大戦を分水嶺として世界情勢の中で民衆の側の力量が、帝国主義勢力を圧倒しうる時代が始まった。江口朴郎氏が歴史家のみずみずしい眼で感嘆するように、ついに「国際政治の場に大衆の意思が大きく働くようになった」⁴⁰⁾ 帝国主義列強のかつての権力政治や小手先の外交辞令では、もはや国際関係は動かなくなったのである。

実際1948年の世界人権宣言をステップとし

て、現代民主主義はグローバルな規模で、過去のブルジョア革命の枠を大きくのりこえて発展をとげた。たとえば、人権の第一世代（国家の干渉の排除を要求）から第二世代（国家の積極的行動を要求）をへて、今日「第三世代の人権」が、——国家の枠をこえて民衆と諸国家とが連帯して帝国主義超大国に強制する人権群（新国際経済秩序や大陸規模の平和的生存権など）が、非同盟運動を主舞台に提唱されているという⁴¹⁾。

民衆は、ついにここまで到達した……。この現状をリアルに理論化し、各人の頑張りを支えている世界史的基盤を明らかにする経済史、貧困化に苦しむ民衆に今日的発展の展望・希望を語る経済史——これこそ現代の民衆が求めているものではないか。そしてこのような経済史の構築こそ、大塚史学を超越する真に稔りある途であることも再度確認しておきたい。

V 民衆発展の経済史を求めて

紙幅もつきたので最後に、マルクス主義史学に寄せられた様々な批判にどう答え、民衆発展の経済史をどう構築すべきか。当面必要と思われる諸課題を列記して結びにかえたい。

(1) 大工業を基盤とした民衆発展の展望の史的解明

大工業を基盤としてもどのような条件が与えられると、民衆は、管理された鳥合の大衆を脱して、その発展を展望しうるのか、を理論的にも歴史的にももっと煮つめる必要がある。民主主義的人権の作用下では大工業の与える発展の潜在的可能性を変革主体の形成＝発展の自由としてある範囲内で顕在化させうる、という大胆な提起を試みた『人間発展の経済学』の成果と問題点は何か。その率直な討論を組織することが急務となっている。

この討論にあたって私見では、第一に民衆発

達における労働者と小生産者との統一戦線結成の今日的意義——反動支配層と闘ううえで相互にたらざる能力をおぎないあう階級間同盟の民衆発展の意味あいを深める必要がある⁴²⁾。

今一つは、農業と工業、大地と人間の生態系に適合した共生が人間発展にもつ根元的意義を深め、この見地から労農同盟の必要性（今日では恐らく工業国民衆と第三世界農民との同盟というグローバルな視野が必要だろう）、都市と農村の人類史的対立を揚棄する展望を解明しなくてはならない。この課題を果さないかぎり、「生態系の経済学の挑戦」は超克できないのではない。

(2) 民衆発展の世界史的視点と一国史的視点の統一

社会主義がなお世界史的に生成期にあるという事情に制約されて、人権の伸長・民衆の発展をめぐる一進一退の壮大な陣地戦が、世界的規模で展開されている——これが現代であろう。

とはいえ第二次大戦を決定的転換点として、世界の三大革命勢力の奮闘と同盟（対等の立場での相互の発展保障）の巨大な力によって、今日ほど人権保障運動が新たな質（「人権の第三世代」⁴³⁾）と規模（国家の枠をこえた⁴⁴⁾）とで強ちに展開されているときはない。今日、地域の公務労働者だけが孤立して人権保障労働を担っているのではない。彼らの背後には2200万人を超える第二次大戦の戦死者たちがたっている。そしてその無数の「わだつみの声」を束ねた世界人権宣言がある。さらにまた、社会主義世界、非同盟運動の国家と民衆から国連・ユネスコに至る新たな人権保障労働の担い手たちがその巨姿を現わしつつある。

このような「連帯する諸国家」自体をも担い手に組みこむに至ったグローバルな人権保障運動の作用の下にわが日本がある。このいわば世界民衆にとっての日本「地域」においてどのような民衆発展の条件がみいだされるのか、という視点での探究がもっと必要ではないだろうか

(他方、アメリカを要とする金融資本集団の多国籍的運動の結果、世界資本主義にとっての日本「地域」の民衆発達にどのような障害が生みだされるか、という逆の視点も同様に必要とされよう)。

(3) 階級概念の豊富化

人間の欲求は動物と異なり、生活水準の物質的向上という狭い経済的範囲に留まるものではない。むしろ環境保全や平和の要求、教育や働きがいの要求などより人間的な発達条件を求める欲求が噴出し、民衆闘争は豊かな展開をとげる。視野を狭く、生産点や生産様式だけに局限し、民衆の「生の様式」——生存と発達のための総体にまで広げないかぎり、この発達のための闘争の全貌を把握することは不可能であろう。すでに共同体や家族・公務労働など生命の再生産＝発達条件に直接関わる領域を包摂する方向へ、階級概念をひろげ、豊富化する必要性が、本誌上で提唱されている⁴³⁾。この課題が果されるならば階級闘争など史的唯物論の基礎概念を放棄することなく、民衆の主体形成を地域・生活・文化など生命の再生産過程総体という広い視野にわたって把握できよう⁴⁴⁾。そしてまた経済史の基盤の上で、今日社会史の提起する諸問題を包摂・解決していく展望もきりひらかれるにちがいない。

(4) 矛盾の動的把握にもとづく「可能性の経済史」

研究史上たえず乖離しがちであった経済史と人民闘争史(狭義の政治史)とを統合する最大のカギは、社会を貫く具体的矛盾総体の動的把握の方法によって社会構成体の変化発展を跡づけること以外にない。

この方法を鍛えるには一方では、経済史研究の分野に矛盾の動的把握という見地をとり戻し、異なる「実在的可能性」の「現実性」への転化を競いあう諸勢力の闘争の経済的基盤、

「2つのみち」の選択をめぐる主体的せめぎあいの客観的基盤を解明しうる「柔軟な経済史」を構築しなくてはならない⁴⁵⁾。そのためには歴史から矛盾の運動を排除することによってたえず運命論・系譜論・結果論——「骸骨の歴史学」におちいりがちな安易な「類型論」的手法を清算する作業が要求されよう。

他方、上の「可能性」の強調は、ありうべき民衆側の敗北のつみ重なりにもかかわらず、これを糧として民衆発達の必然性が大きく貫いているという認識と結びつけねばならない。実際人民闘争史だけを強調する教材で「百姓一揆」の悲劇を学習させたばあい、「昔は何とみじめだったか、それとくらべると今はまだ」という過去と現在とを切断した皮相な歴史認識に生徒がおちいりがちだという。この「敗北史観」の問題点を克服するためにも、民衆発達という赤い糸で過去と現在とを結びつけること、人民闘争史と経済史とを民衆発達の見地になつて真に政治経済史的に総合＝統一することが必要なのではないだろうか。

注

- 1) 拙稿、「経済史研究の当面する一課題について」本誌第15号、76年5月、78ページ。
- 2) 歴科協編『現代史の課題と方法』(歴史科学大系34巻)82年所収の平田哲男氏の解説、301ページ。
- 3) この点については、和田春樹「現代的『近代化』論とわれわれの歴史学」、安丸良夫「日本の近代化についての帝国主義的歴史観」(いずれも同上書所収)、および芝田進午「近代主義」『講座・現代日本とマルクス主義4巻、イデオロギー』66年所収の質の高い先駆的批判を参照。
- 4) 上田耕一郎「マルクス主義の現代的課題」同上書所収、に当時の状況が活写されている。
- 5) この論争の内容は、堀米庸三『歴史と人間』65年に詳しい。マルクス主義の側から論争を総括する最近の試みとして永原慶二「歴史認識・叙述における人間の問題」『唯物論』7号、77年3月および犬丸義一の連作(『歴史科学の課題とマルクス主義』70年、292—355ページ所収)が重要。
- 6) 大塚久雄『社会科学における人間』77年、80ペ

- ージ。
- 7) 以上の論点は、『スターリン批判』における政治の論理」という有名な論文で丸山真男が定式化したもの。丸山真男『現代政治の思想と行動』64年、318—337ページ参照。
 - 8) 『経済セミナー』の「マルクス死後100年」特集号、83年2月のなかでは冒頭を飾る竹内芳郎論文が、この傾向を代表している。
 - 9) 庄司興吉『現代日本社会科学史序説：マルクス主義と近代主義』75年の要領のよい整理をみよ（とくに第Ⅱ章）。他方、この動きに大工業の人間発達論で防戦しようとした芝田進午の孤軍奮闘的労作が『人間性と人格の理論』61年（丸山真男、前掲書の108刷に対して25刷ノ）であった。
 - 10) 山之内靖『現代社会の歴史的位相』1982年、および「フォイエルバッハとマルクスの対話(上)」『経済評論』83年4月号参照。しかし、階級諸社会を超えた歴史貫通的で最も人間的な視点とは、人類の進化・民衆の発達という見地ではないか。
 - 11) 遠山茂樹「歴史に於ける偶然性」『思想』52年2月号、18ページ、犬丸義一、前掲書、333ページ。
 - 12) たとえば「昭和史論争」に触発されて組まれた『思想』57年5月号の歴史特集に掲載された石母田正「政治史の対象について」、松本新八郎「政治現象としての上部構造」、犬丸義一、前掲書332—355ページなどを参照。
 - 13) たとえばその反省として、東京歴科研編『転換期の歴史学』79年所載のシンポ発言を参照。
 - 14) 『思想』79年9月号の「特集・社会史」、同年10月号の『歴史評論』の特集などがこの傾向を代表している。
 - 15) 内田義彦『日本資本主義の思想像』67年39—53ページ。
 - 16) 大塚久雄『近代化の人間の基礎』、著作集第八巻、176・188ページ。
 - 17) 同上書、214—221ページ、大塚久雄『社会科学における人間』第1章も参照。
 - 18) 内田義彦氏の次の発言は「市民社会論者」の思考様式を知るうえで興味深い。「一物一価＝価値法則を媒介にして結局資本制取得が成立する。ところが、価値法則が貫徹しなくても、資本制取得が成立する。日本の資本主義は第二の意味で資本主義であっても、第一の意味では市民社会ではない」（内田、前掲書、92—93ページ）。
 - 19) 大塚、『近代化の人間の基礎』172ページ。
 - 20) これら理論の社会学的意味については、さしあたり石井伸男、「社会論」、中村行秀編著『現代の哲学』79年所収をみよ。
 - 21) この点、基礎研編『人間発達の経済学』81年、80ページなどの池上倅・森岡孝二氏の鋭い指摘を参照。
 - 22) とくに最近の論稿にはこの傾向が著しい。たとえば大塚『生活の貧しさと心の貧しさ』78年、20・68・81ページなどをみよ。
 - 23) 前期的資本を価値法則と対抗関係におく大塚氏の機械的見地に対して、樋口徹「前期的資本の範疇転化について」『東大経済学研究』3号、64年10月が鋭い・そして基本的に正しい批判を展開している。
 - 24) 芝原拓自・鈴木良・安丸良夫「思想としての社会科学」歴科協編前掲書、270ページの先駆的指摘を参照。
 - 25) この指摘として大塚秀之、『アメリカ合衆国史と人種差別』81年、31ページ。
 - 26) エンゲルス『家族・私有財産・国家の起源』著作集21巻、67ページ。実際フランス大革命でさえ、婦人の政治参加を禁止し、ナポレオン法典の「夫は妻を保護し、妻は夫に服従する義務を負う」という差別的条項が廃止されたのは1938年、イギリスでも財産問題で妻を無能力者として扱う不当な差別法規が基本的に解消したのは1936年になってからであった（不破哲三『「家族・私有財産・国家の起源」入門』83年、122ページ）。
 - 27) 大塚、『近代化の人間の基礎』、77・300・351ページなど。
 - 28) たとえば大塚『「農民層分解」に関する基礎的考察』著作集5巻、166—167ページ。
 - 29) このような『資本論』理解の歪みについては、尾崎芳治氏の「ブルジョアの土地変革の理論」における体系的批判に教えられた。また上野俊樹『経済学とイデオロギー』82年、の第10章も参照のこと。
 - 30) たとえば松永健二「19世紀中葉イリノイにおける鉄道建設と公有地処分過程」『海南経済学』第6号、78年3月など一連の論文。また「統治能力の略奪」については『人間発達の経済学』70ページ。
 - 31) 周知のようにマルクス・エンゲルスは、悠久の人類史を大きく、①数十万年の原始共産制社会、

- ②数千年の階級＝文明社会，③来たるべき共産主義社会と三段階で把えた。とくにエンゲルスは、この搾取にもとづく文明社会を程度の差はあれ、ともに商品生産の盲目性、貪欲な私有財産追求、精神労働と肉体労働・都市と農村の対立に貫かれたものと把え、その否定のうえに無階級社会の高級復活を展望した（エンゲルス、前掲書、172—177ページ、不破哲三、前掲書、392—406ページ）。したがって人類史の分水嶺を共同体と市民社会、前期的資本と産業資本の間に求める大塚史学とはイメージを相当異にするというべきであろう。
- 32) 増谷英樹「ヨーロッパ近代と民衆」歴研編『現代歴史学の成果と課題』Ⅱ、第3巻、82年所収、11—15ページ。
- 33) この点で「社会主義生成期」論について「世界的視角と一国的視角の統一」を提唱する芦田文夫「社会主義の発展段階規定の一考察」『前衛』83年4月号が示唆的である。
- 34) P. M. スウィージー、H. マグドフ、伊藤誠訳「アメリカ資本主義の危機」1982年、125ページ。
- 35) この姿を浮き彫りにする好著としてハワード・ジン、猿谷要監訳『民衆のアメリカ史』82年のとくに〔下〕を参照。またこの姿を関西アメリカ史研究会編著『アメリカの歴史：統合を求めて』上・下、82年は、異端の出現一統制統合の単純なくりかえしとして把握しようとするが、しかしそのなかで民衆側の力量がいわばらせん状に発展し、潜在的に蓄積されていることを忘れてはならない。昨夏のニューヨークの反核大集会の「突如とした」未曾有の高揚は、「草の根」に蓄積された潜在的力量がいかに巨大であるかを、アナーキーな運動に流れがちのアメリカ固有の危険とともに見事に浮き上らせた（上杉忍「ニューヨークでの反核運動」『歴史学研究』82年10月号、48ページ）。
- 36) この動きを主導した江口朴郎氏は『世界史における現在』80年、でこう書いている。「……世界史の現在は、そのようなそれぞれ地域の人民自身が、みずからの生きかたを考え、そのための道を発見する能力をそなえつつある段階だ……」（同上書、61ページ）。
- 37) 犬丸義一、前掲書、133—147ページ。また大塚久雄編『後進資本主義の展開過程』73年の5—32ページも参照。
- 38) 二宮厚美「経済学における人格論」『人間発達

の経済学』95—96ページ。

- 39) 「ミニ・スタディ、市民社会と女性」本誌21号、78年2月、13ページを参照。
- 40) 江口朴郎、前掲書、136・139ページ。
- 41) その詳細は、松井芳郎「歴史の中の平和的生存権」『赤旗』83年2月5日付を参照。
- 42) そのための好箇のレポートとして、志賀岑雄『草の根のうた：地域を支える業者たち』83年を参照。
- 43) 池上惇「階級論の最近の動向と官僚機構研究の重要性」本誌27号、80年春季、「シンポジウム・現代の階級理論と労働者階級(完)」本誌28号、80年夏季など。
- 44) 歴史学研究会の82年度大会テーマ「民衆の生活・文化と変革主体」は、ほぼ同様の問題意識にたって企画されたものである。
- 45) この点については犬丸義一「階級闘争史研究の方法論—『歴史における可能性』の理論をめぐる」林基監修『階級闘争の歴史と理論』Ⅰ、81年に多くを教えられた。

(筆者 所員・京都支部)

討論のまとめ

「変革主体の今日的形成という切実な課題を果すには、マルクスから何を学びとるべきか——とくに史的唯物論の諸範疇をどのように再構成し、現代によみがえらせるべきか」というテーマに肉薄すべく、所外から重田澄男氏をむかえ活発な議論がかわされた。森岡孝二、藤岡惇両所員の報告を含めて、シンポジウムでの報告内容については、掲載論稿の参照を願うとして、ここでは当日なされた主要な論点を紹介し、まとめに代えることにする。

(1)重田報告に関して。①唯物史観の規定的内容をどのように捉えるべきか、②商品・貨幣論、疎外論に特徴を有する初期マルクスと商品・貨幣論、剰余価値論に特徴を有する『資本論』段階のマルクスとを結びつける鍵はなにか、③社会変革の展望をどのように見透してい

るのか、が疑問点として提出された。この3論点について報告者は、それぞれ、①唯物史観の規定的内容を、ほとんど大部分の研究者が強調している「土台・上部構造論」＝「社会構造論」として捉えてはならず、そうではなく「歴史的形態規定性」に認めるべきであって、マルクス、エンゲルスの理論形成史をフォローすれば自明のことであり、唯物史観の「導きの糸」としての役割は5つの特徴に総括される（重田『資本主義の発見』156ページ参照）、②転換の画期は『経済学批判要綱』執筆時に看取されえ、この時期においてはじめて商品・貨幣関係（＝「自由、平等、所有、およびベンサム」）と資本主義的生産関係との統一した把握が可能になったのであり、直接には唯物史観の確立とは一致しない、③なによりもマルクスも強調している「自由人の連合」にもとめており、その意味では市民社会論者が提起する問題意識を理解できる、とされた。

(2)森岡報告に関して。①労働日短縮の意義はいうまでもないが、それが剰余価値論に属するという意味では論理次元上での限度を、階級闘争そのものとして私的所有の廃棄を展望するという意味では内容上での限度をふまえるべきではないのか、②労働日短縮→自由時間の確保→発達とおさえた場合、その発達の内容は政治的訓練・政治的力の蓄積という側面と「半労・半学」を旨とした人格的豊かさの獲得という側面の両者をみる必要があるのではないか、という疑問にたいして、報告者は大略以下のように答えられた。①2つの次元上での限度を大筋では認めるが、労働日短縮は剰余価値論だけに局限されるものではないこと、さらに私的所有の廃棄後においても「労働に応じた分配」・「必要に応じた分配」という形で問題になりうることからして、この労働日短縮の意義はいわば歴史貫通的な根本思想・経済法則とでもいえるものである。②指摘の通りではあるが、そもそも発達とは諸能力の全体性を包含してのことであり、自由時間内での種々の活動が政治的力と人格的豊かさを保障していくものである。

(3)藤岡報告に関して。①現代における発達論を考える場合、全般的危機がわれわれに押しつけている現実の事態、すなわち階級闘争のグローバルな展開および全面化（総じて軍事化と合理化）を出発点に据え、それとのかかわりで発達論を考えるべきではないのか、②大塚史学批判については、「市民社会論の人間発達論」としての限界を指摘するだけなら、「資本主義タイプの理論」にたいして「段階論」を対置することになり、批判としてなりたつためには「型の理論」まで踏み込まなければならないのではないのか、さらに、大塚史学にとって発達の主要内容である、独立した強固な人格の形成はいかなる意味を有するのか、③また、市民社会論にあっては民主主義の担い手といった場合も、統治するものとされるものとの堅固な分業体制を前提しているのではないのか、この3点に集約される論点が提出された。報告者は、①にたいしてはそれを認められ、②、③については以下のように自説を敷衍された。すなわち、②大塚史学の場合、「ロビンソン型人間類型」に端的に示されるように、英米型の近代化のうちに民衆発達の希望を語りうるとはいえ、大工業の進展とともに逆に発達の障害を強調することによって人間発達の展望のペシミズムにならざるをえないところに問題があると同時に、また、発達の内容は神と人間（個人）との対決を背景とした個人的頑張りの域を出ないこと、③それと関連して、戦前日本のような「伝統主義的な共同体の人間類型」にたいする批判の意義を有したことは認めざるをえないが、何よりも共同体からの解放、近代的人間・個人の形成だけをもって民主主義の担い手としたところに国家や階級支配を揚棄しえぬ限界がある、とされた。

以上のように、討論の内容は、史的唯物論、発達論、主体形成論にわたっており、なかでも発達論、主体形成論に討論の比重がおかれたことからすれば、『講座・現代経済学』、『人間発達の経済学』に結実した基礎研の共同研究の成果を踏まえてのシンポジウムであったと確認できるだろう。

なお、討論のなかで、労働日短縮→自由時間という論理と絶対的貧困化を軸とした論理という人間発達の2つの論理をどのように結合させるのか、また、基礎研なりの「所有の経済

学」を考えるべき時期ではないか、との意見があったことを最後に付記しておく。(文責 赤間道夫)

寄贈書紹介・働きつつ学ぶ成果

人間・社会・歴史研究会編『人間・社会・歴史の研究』(1977年, 123ページ)

本書は「人間・社会・歴史研究会」の共同研究の成果を数名の労働者がまとめたもので、好評のため82年に再版がだされている。全体は3部に分け「Ⅰ. 現代の大衆的人間状況と人間回復・発達の方向」では、今日の資本と対峙する人間の諸類型が、ケース・スタディ、会員の肉声をとおして語られる。

「Ⅱ. 人間回復・発達にむけての国家行政機構論」では、各地の革新自治体建設の教訓を吟味するなかで、地域住民運動の発展や先進国革命の展望が真剣に模索されている。そして最後に「人間回復・発達にむけての経済建設論」で結ばれている。

みられるように本書の対象は極めて総合的であり、しかも人間発達の見地から日本経済の矛盾と改革の方向が終始一貫追求されている。その実践的問題意識の鋭さ、働きつつ学ぶ意欲・情熱のほとばしりに圧倒されるのは評者だけではあるまい。5年も前に『人間発達の経済学』と共通の問題意識、類似した方

法に貫かれた研究がすでに公けにされていたことに驚きを禁じえない。

この研究会は、現在神奈川県在住の勤労者約30人にひろがり、原理論、社会構成体、労働運動論、日本経済分析、文学論の5つの部にわかれて活動中とのこと。巨大工場の密集する神奈川の特質から、会員の7~8割は民間企業労働者で占められ、公務員関係は少く、また大学教員の恒常的参加がないことが痛いとのことである。いずれにしても働きつつ学ぶ運動の担い手—先進的労働者の集団がわれわれも知らないところで自然発生的に多数うみだされており、力強いかぎりである。互いに交流を深め、励ましあうなかで、この胎動をより組織的なものに変えていかなければならないと思う。

〔研究会の連絡先〕 藤沢市亀井野 890-7

大浦 秀雄

0466-82-7866

(A. F.)